

銀

賞

『ニセモノ』

一セモノ

神奈川県　日本女子大学附属高等学校三年　深澤未知佳

八月十五日。

「（）んにわせ」

「（）やかに挨拶する」近所さん。

「（）んにわせ」

私はいかにも面倒臭そうに返事をした。お姉ちゃんなり（）んな時でも可愛らしく愛想良く由比満郎の対応ができるのだろ。しかしこの時の私にそんな余裕は無かつた。あんなに大変な事が起きたといつのに随じうして普通に過（）していられるのだろ。なぜ普通に挨拶なんてできるのだろ。やっぱりあの事を引きずっているのはもう私だけなのだろ。か。

そんな事を考えて（）るといつの間にか家に着いていた。

「ただいまー」

重い玄関のドアをゆっくり開ける。

「おかえりー」

懐かしい声がした。氣のせいだと思つた。

それでもわずかな希望を胸におそるおそるリビングの扉を開く。

一ヵ月前、私のお姉ちゃんが亡くなつた。なんの前触れもなく突然に、交通事故で。まだ十四歳なのに。

そのお姉ちゃんが今私の目の前でさも当然のようにポテトチップスを食べている。一体今何が起つているのか。亡くなつたはずの人があふれるなんて。頭の中が混乱して何も整理できない。

「お姉ちゃん?」

お姉ちゃんは「」と不思議な笑みを浮かべた。困ったときに笑顔になる、お姉ちゃんの癖。私の目の前にいる人の人は間違いなくお姉ちゃんなのだと確信させられた。突然と立ちつくす私をお姉ちゃんは何も言わず自分の部屋へ連れて行つた。死んだはずのお姉ちゃんが今私の手を握つて歩いている。信じられない。でも階段の途中で気がついてしまつた。お姉ちゃんは私の質問に決してうん、そういうことは答へなかつた。お姉ちゃんではないといつてだらうか。もしかして幽霊? そういうれば今つてお盆……。嫌な予感が頭を駆け巡りだんだん私の手を握つて歩いているお姉ちゃんが恐ろしくてたまらなくなつてきた。

私が急に立ち止まつたせいだらう。お姉ちゃんが私の方を振り返る。今からでも逃げなきやーと思つた次の瞬間、

「」とおけじ幽霊とかじやないかい

私の考えを見透かしたような発言に驚きを隠せない。しかし一安心したのも束の間。

「まあでもそれに近い存在なのかもね」

「私、あなたの姉ちゃんの二セモノなの」

もう何もかも詰が分からぬ。これ以上何かあつたらきっと心臓がもたないだらう。

話を詳しく聞いてみると、どうやら二セモノは性格、仕草など隅々までお姉ちゃんと全く同じのいわゆる口

ピーのような存在らしい。

そんな話もちゃんと信じるはずがない。よく出来た夢、ドッキリ、幻覚、色々な可能性を考えた。けど、この際正体なんて何だつていい。どんな形でもいいからお姉ちゃんとまた一緒に居たい。一緒に学校に行つて家に帰つて、飯を食べたりゲームで遊んだり、まだやり足りないことがたくさんあるのだ。心の奥底でモヤモヤしていた思い出の数々が一斉に溢れ出して気がついたら一セモノを受け入れてはいる自分がいた。お姉ちゃんなら本物でも一セモノでもいいなんて我ながら最低だと思つ。でも亡くなつたはずの大切な人が目の前に現れたら誰だつてこななるだろ。

しかしそれにしても一セモノは本当にお姉ちゃんにそつくりだ。きっと一セモノと本物を並べられてどちらが本物か見抜けと言われても私には不可能だろ。一セモノは私が凝視しているのに気がついて「何か他に聞きたいことはある？」

と何だかちよつと楽しそうに尋ねた。聞きたい事はもちろん山ほどある。どこから来たとか人間なのかとか。でもこれだけは聞かないといけない気がしていた。私のためにも、お母さんやお父さんのためにも。

「何のためにお姉ちゃんのフリをしてじるの。何か目的があるならはつきり言って」

語気が荒くなつたのはきっとお姉ちゃんのマネをする存在をやはつざしかで許せていないからだろ。

「そんなに怒らないでよ。強いて言つなら私の運命の選択をしてほしつてだけ！」

「選択？」

「そうー。私を消すか消さないかつてー」とー。

なんだそれ。責任重大じゃないか。私は明日からの一週間以内に一セモノを消すか消さないか決めなければな

うなしそうだ。この時の私はまだ事の重大さに気がついていなかつた。いつも二セモノお姉ちゃんと私の奇妙な一週間は幕を開けたのだった。

その日はまだ事情が飲み込めなくてまともに二セモノの顔も見れずに一日が終わつた。ベッドに入つてこの刺激的な一日を振り返つた。未だに全て夢なのではないかと疑つてしまつ。しかしもしこれが現実だと云つのならば私は二セモノの運命を選択しなければならない。その晩、私はたくさんたくさん考えた。二セモノといつ存在はやつぱり生理的に受け付けない。でもお姉ちゃんとこれからも一緒にいたい。そして決断した。一週間二セモノお姉ちゃんとの生活をとことん楽しもう！ そして最終日に二セモノを消そう！

八月十六日。まず朝起きて

「おはよー」

と叫ぶながらソビングに下りると叫速二セモノと対面した。まだ慣れなくて一瞬硬直したが昨日の夜のことを思い出してなるべく普通に接した。

「お姉ちゃんもおはよー」

そうじえばお母さんたちは二セモノに気がついていない。そもそも娘の死を忘れている。姉の遺影なども撤去されていいる。二セモノがやつたのだろうか。不安が強くなつた。

午後からは私と二セモノでお出かけをした。今日はもともと本物の姉と映画を観に行く約束をしていた。私は映画で感動して泣いたことがまだ一度も無い。

「今日は特にポップコーンを買ったから食べる」と頭がいつぱいで内容が何も入つていなかつた！

と不満をつぶつと二セモノは声をあげて笑つた。笑つているが目はウルウルしている。ただの映画でいぐらな

んでも泣きやがった。姉はよく笑うしよく泣く。やつこつといじりにも私は憧れている。

「お姉ちゃんつてほんと涙もろいよね」

「あのシーンで泣かない人なんてなかなかいないう」

一人しておかしくなつて笑い合う。私は姉との暖かい時間が返つてきたような気がしていつも一度と離すまいとその幸せを噛み締めていた。

家に帰つたら私たちは休む暇もなく一緒にテレビゲームをした。一人ともゲームは大好きだけど実はお姉ちゃんはゲームがとてもなく下手だ。一方、私はこうとゲームの腕にはまあまあ自信がある。そんな二人が一緒にゲームをやると当然衝突する。

「ちょっとお姉ちゃんそこどいてよ…」

「あー、間違えて味方に攻撃しちやつた！」「めんー！」

「なんでそんなに下手なのよー…」

「ひどーー。もうーー。」

今日も相変わらず口喧嘩は勃発した。けど、なんだか今日はちょっと樂しい。いつも通り自然に仲直りして一日が終わつた。

夜に私はまたネガティブになつて余計な事を考へていた。今日一日とっても樂しかつた。樂しかつたけど……。お姉ちゃんをニセモノで穴埋めしているんだと思つと自分が惨めに思えてくる。そんなモヤモヤを抱えながらいつの間にか私は眠りについていた。

八月十七日。この日もニセモノと一緒にいた。ニセモノは相変わらずボロを出やがりにお姉ちゃんを続け

てしる。ふとした時に「セモノが偽物だ」ということを忘れてしまつ。

八月十八日。二セモノと一緒に自由研究をした。フルーツポンチが盛られたお皿の真ん中にサイダーのボトルを立ててその中にメントスを流し込む。まるで噴水のようサイダーが噴き上がる。

「すー」「ー ゆー」「ー」

と喜ぶ二セモノはお姉ちゃんそのものだつた。この瞬間から私の中で何かが大きく変わつた。

八月十九日。お姉ちゃんと一緒に冷やし中華をつくりた。これも夏休みの宿題の一環だ。お姉ちゃんが慣れた手つきできゅうりを素早く切つていく。一方私はトマトのへたに悪戦苦闘中だ。お姉ちゃんは他のことはさっぱりダメなのに料理だけは大得意なのだ。完成した冷やし中華は誰がどの部分を作つたのかが分かりやすく表れていた。

八月二十日。今日はもともと友達と遊ぶ約束をしていた日だつた。お姉ちゃんと一緒にいたい気持ちは山々だが久しぶりに友達にも会いたいので今日くらいは仕方がない。待ち合わせ場所に着くと彼女はもうどつぶに着いていた。

「さきちゃん!」

さきちゃんは可愛くて優しくて頭も良くて私の大好きな友達だ。今日は学校のプールの開放日なので私たちは学校に行くことにした。学校に着くまで他愛もない話をたくさんした。

「宿題終わつた?」

「全然終わりそうにないよ。日記とか特に後回しになるよね

「旅行とか行かないと書く」とないしね

『気がついたらもう学校はすぐ田の前にあつた。夏休みの小学校はなんだかいつもと違う特別な感じがする。ワクワクする。久しぶりに来たからだらうか。学校のプールに行くと思つたよりも人がたくさんいた。』

「五年生はー！」のレーンを使って「だやーい」

そう呼びかける先生のいるレーンに行つて私とやきちゃんは泳いで遊んで喋り倒した。水しぶきや蝉の声、みんなの笑い声も相まって今年一番「夏」を感じた。

帰り道、私はやきちゃんに訊いた。

「やきちゃんはもし今はもういない大切な人の二セモノが現れて、その人のーんを消すか消さないか選べって言われたらどうする？」

「なにそれ」

やきちゃんはキョーレンとしている。当然だ。私も最初は理解が追いつかなかつたのだから。

「うーん。よく分かんないけど私だつたら消しちゃうかもな。なんか怖いし、二セモノを残しておくのって本物にも申し訳なくないー。」

「……。そうだね」

言葉に詰まつた。やきちゃんが言つてゐるとは正しことと思つた。

私はやきちゃんと別れたあとも考へた。一般的に見てもやきちゃんと同じような考への人は多いだらう。

「でもそれって実際体験してないからじやない？ じや田の前に二セモノが現れて一週間一緒に遊ばしても消すなんて言えるの？」

心の中の私がそう問いかける。やきちゃんは私の気持ちを何も分かつてない。ハッタリだとは分かつている

がさきちゃんに對して少し怒りが湧いてきた。せつとの時の私が求めていた答えは

「消さなくていいんじゃない?」

だつたのだらう。誰かにニセモノに縋りついている自分を肯定して欲しかつただけなんだ。私は完全にニセモノを偽物だと思えなくなつていた。

その夜、夢を見た。お姉ちゃんのお葬式の夢。お坊さんがちょうど皆にお話をしに来られた。

「人は残念ながら失つてからその大切さに気がります。その人が生きているときにもうといつしておけば良かつた、あれを言つてあげれば良かった、そつやつて後悔していく生き物なのです」

まるで私に言われているかのようだつた。お葬式が終わつても皆すつと泣いていた。そんな中、お姉ちゃんの遺影だけは笑つていて。その遺影の隣には何やら難しい漢字の書かれた板がある。それをじつと見つめていた私に横からお坊さんが言つた。

「これはお姉ちゃんの天国でのお名前だよ」

天国での名前。そつか。お姉ちゃんはもうこの世の人じやないんだ。お姉ちゃんはもう踏ん切りがついて天国で新しい生活を送つているのか。なのに私は……。

八月二十一日。私は昨日の夢を引きずつていた。

明日には消すか消さないか答えを出さないといけないのにじつはしょ。迷宮に放り込まれたような気分だ。悩みながら朝ごはんを食べていると

「おはよー」

お姉ちゃんが起きてきた。

「どうしたの？ 何があつた？」

と、お姉ちゃんが聞いてくる。さすがに本人にあなたを消すか消さないか迷つてゐるなんて言えない。

「別に、色々考えてただけ」

と私がそつけなく答えるとふーんと呻つてどこかへ行つてしまつた。

そこからのお姉ちゃんは何かがおかしかつた。まず、私たちでケーキを食べたとき。私が一つしかないショートケーキを食べようとしても何も言わなかつた。いつものお姉ちゃんならショートケーキだけは絶対に譲らないのに。むしろ今日のお姉ちゃんは自分のケーキを一口分けてくれた。おかしい。お姉ちゃんはいつも優しいが好きなものは断固として譲らない人なのに。他にもゲーム中に怒りだしたり、私をいつもと違う呼び方で呼んだり、今日のお姉ちゃんはどこか様子がおかしかつた。そして私は改めて思った。そうだ、この人はお姉ちゃんではなく二セモノなんだ。きっと長く一緒に過ごしすぎたから二セモノのミスが目立ち始めたのだろう。

極めつけには、今日が私の誕生日だと勘違いして私の好きなお菓子を渡してきた。ちなみにそのお菓子も私は全く好きではないし食べたこともない。

「嬉しそうけど今日誕生日じゃなによ」

「え？ そうだつけ」

二セモノは少々焦つていてるように見えた。

違和感を覚えたまま私は最終日の夜を迎えた。お風呂に入りながら私は今までのことを思い返していた。二セモノが来た日のこと、二セモノとの楽しかつた日々、さきちゃんに言われたこと、お葬式の夢のこと、様子がおかしかつた二セモノのこと、そして、本物のお姉ちゃんとの懐かしい思い出、全部ひつべりぬめて私はついに決断

を下した。

その晩、私は一セモノと一緒に並んで寝た。一セモノの体温が暖かかった。それも全部偽物なのに。

八月一十一日。今日家にいるのは私と一セモノだけ。

「お姉ちゃんもお茶いる?」

「うん。ありがと」

今言わなければならぬと思つた。

「やつぱり本物のお姉ちゃんを選んでいたの。」

私は一セモノがどんな表情をしているのか見ようともしなかつた。傷つけてしまつ」とが怖かつた。

「そつか。やうだよね。どうしてやうと思つたの?」

一セモノの返事は意外とあつさりしていてなんだか面接みたいだなと思つた。

「言動とか仕草とか性格とか全部似てるけどやつぱり少し違う。本物のお姉ちゃんと似ていても似せ者止まりだなつて思つたの」

「あなたのお姉ちゃんは特にまねできない性格だったからね。大変だつたよ」

「そんなことを思つていたのか。一セモノの本音^{ほんね}を聞いたのは初めてな気がする。

「それだけじゃない」

私にはまだ言つたじ」とがある。お葬式の夢^{ゆめ}の「」と……。

「お姉ちゃんはきっともう天国で幸せに暮らしてゐから私も前を向かないとなつて思つたの」

一セモノは口を丸くした。そして聞こえなじへりの声で確かにこう言つた。

「お姉ちゃんに似てるね」

と。まるでお姉ちゃんを知っているかのよつな口振りだ。でもたしかに、こんなにお姉ちゃんに似せることが出来るなら会つたことがあつてもおかしくない。

「あなたのお姉ちゃんも偽物に会つたことがあるんだよ。あなたの偽物に」

「どういうことだ。私の偽物もいるのか。予想のやうに上をいく二セモノの返答に困惑した。

「あなたのお姉ちゃんがまだ小さい頃にね……」

お姉ちゃんは小さい頃両親にちやほやされて、いる生まれたての私に嫉妬して、いた。そこで偽物が来て、いついつつたそつだ。

「君にひつて都合が良い偽物の妹とちやほやされて、ワガママな君の本物の妹、じつかがいい？」

「本物が良いに決まつてる」

思わず涙で視界がぼやける。お姉ちゃんのこと、が大好きな私で、セモノと本物の間で、あんなに揺らいでいたのに。一瞬でも、二セモノを選ぼうとしていた自分に恥ずかしくなる。

「あなたとお姉ちゃんだけじゃない。他にも色んな人が大事な選択をしながら生きている。あなたの下した決断をきつとお姉ちゃんも誇りに思うはず」

私は二セモノを諒解していた。二セモノはただお姉ちゃんの代わりになつて生きて、いたいだけだと思つていたけれど、本当は全部私のためにやつてくれたのかも知れない。私は思わず二セモノに抱きついた。そして人生で一番とひつていいほど心を込めて、言つた。

「ありがとう」

「その時ふと私はあることに気がついて一セモノにこう訊いた。

「昨日あんなに様子がおかしかったのは……」すると急に周りがキラキラと輝き始めて何も見えなくなつた。気づいたときにはもう一セモノは田の前にいなかつた。私が消した。私の選択によつて。

落ち着いてからリビングに行くと遺影が戻つていた。お仏壇もちゃんとある。日常に戻つたのだ。お姉ちゃんのいない日常に。でも今の私は以前とは違つ。ただ寂しさ、辛さを我慢するだけのみじめな私ではない。姉の死をバネに今私は前に進もうとしている。

そこで彼女は日記帳を閉じた。溜まつていた夏休みの宿題の日記をよひやく今消化したのだ。一セモノと過ごした一週間は間違いなく彼女の糧になつていた。

「きっと」んな話誰にも信じてもうつれないだろつた
と彼女は呟く。

一方その頃、天国では彼女の姉と彼女によつて消された一セモノが上から彼女を見下ろしていた。
「なんだわざ」とあの子が自分を消すように仕向けてたの？」
「だつて絶対あなたならそうするでしょ」

実は一の一セモノは彼女が思つてゐる何倍も優秀だったのかもしねり。